

解答例・出題意図

I

問1. 【出題意図】

本書のキーワードの一つである「複雑性産業化」の内容について、正確に読み取ることができるか、読解力を問うている。

問2. 【出題意図】

限られた字数のなかで、電機産業の競争力が低下した要因を的確に説明することができるか、まとめる力を問うている。

問3. 【出題意図】

本文の内容を理解した上で、今後の日本の産業の展望について自分の考えを正確に表現することができるか、自分の考えを表現できる能力を問うている。

II

問1. 【解答例】

歴史家は、史料にもとづいて事実を確定するが、史料が残されていないために、どうしても詰められないところが出てきた場合、これ以上は断言できないと述べるしかない。その一方で、小説家は、歴史学的に確認された史実を踏まえ、想像力をめぐらせて、その歴史家が立ち止まった場所から先を、深い人間理解を拠り所として書きすすめることができる。このように小説家が必ずしも史実に拘束されない状況を意味している。(193字)

問2. 【出題意図】

『独ソ戦』（岩波新書）で知られる軍事史家である①の著者は、実証主義的歴史学者として、史料にもとづいた検証を重ねれば、事実を確定できるという立場をとっている。一方、②の著者は、『言語の本質』（中公新書）の共著者でもあり、言語を通じた事実認識における主観性を強調している。両者の立場の違いは、ソシユール言語学に端を発する「言語論的転回」をめぐる歴史学の議論にも重なっている。すなわち、実証主義的歴史学が厳格な史料批判を繰り返すことによって客観的な事実にとどり着くことができるとみなしてきたことに対して、「言語論的転回」における批判では、ある語（シニフィアン）と、それが指し示す意味内容（シニフィエ）との間の関係が恣意的であるがゆえに、その言語にもとづいた認識も恣意的となることから、客観的事実認識の不可能性が主張されている。しかし、後者の立場を極限まで突き詰めると、「真実性」を追求する努力を一切放棄して、小説家のように想像力の産物として歴史を描いてもいいことになってしまう。

問題は、以上のような二つの立場の違いを、問題文を通してどれほど理解しているかについて、まず問うものである。そのうえで、事実認識に関して自分がどのような立場をとっているかについて、適切な事例を具体的に挙げながら、説明することを求めている。